山と花のたより　104号

２００９年 10 月 12 日　松尾

メールアドレス　tadashi6414@smile.ocn.ne.jp

高校同窓会の登山旅行

「石鎚山～四万十川～剣山」１日目　面河の宿

9 月 26 日午後2時が集合時刻だったが、リーダーの私の遅刻で出発が１５分程遅れてしまった。面目ない話だ。

この同窓会登山旅行も今回から運転手さん付きのマイクロバスで移動することになった。安全の面でも、一部の参加者に特別の負担をかけなくてすむようになった点でも、評価すべき改善点であった。その運転手さんは地元愛媛県で生まれ育った人で、話題豊富、まじめで親切そして柔軟、随分と無理を聞いてもらった。有難うございました。

写真右　アキノキリンソウ

写真上　シコクフウロ　下オオレイジンソウ

バスは**久万高原町**に入り、更に山の中を走りぬけて夕刻**面河（おもご）渓谷**の宿に着いた。当地でほとんど唯一と言っていい宿はかなり古びており、どこか落魄とした雰囲気を漂わせている。

夕食には炊き込みご飯が出た。一口含んでごっちんと分かった。「**ごっちん**」とは、「炊きあがっていないご飯」を指す長崎の言葉だ。気圧の低い高山では沸点が 100 度に達しないので、**ごっちん**がよく出来るのだが、今夜のはどうした事だろう。

それとなく給仕にあたっている女性たちを見ると、いずれも「常勤」ではなさそう。久しぶりに 22 人もの客を迎えて臨時に集められた近在の人達なのだろう。

そうだとすると苦情を申し立てるのが気の毒に思えて、黙って芯のある飯粒を噛み砕きながら食べた。

しかし、すぐに皆が騒ぎ出し、ついには炊き直すことになった。最近では山小屋でも出くわさない珍騒動であった。

←写真はミソガワソウ（シソ科イヌハッカ属）

色めく石鎚（いしづち）**山にみんなで登る**

9 月 27 日早朝、バスで**土小屋**まで送ってもらい、16 名の男女が**石鎚山**を目指した。残りの５名はバスで**内子町**の観光に。

石鎚山系は西日本の最高峰・**石鎚山**（1982m）を盟主に東西１００キロに亘ってそびえ、西四国を南北に分けている。この日のコースはその主脈山稜に沿って東から西に向けて歩く道なのだ。

険阻な箇所には巧みに桟道や梯子がかけられ、全体として緩やかな傾斜を登っていく。沿道には**アキノキリンソウ、シコクフウロ、シコクブシ**（トリカブトの仲間）、**レイジンソウ**（伶人草・トリカブト属）、**ミソガワソウ、ハガクレツリフネ、シオガマギク、リンドウ**など秋の花々が咲いていて楽しい。

途中で男性一人が脚に痙攣を起こしたが応急手当と仲間たちの援助で**成就からの道との合流点**まで歩いた。合流点からは急登の険しい道になり、見応えのある紅葉が霧のベールを伴ってひろがり、また石鎚名物の**二の鎖、三の鎖の鎖場**もある。男性数人が鎖に挑んだ。結局**頂上を踏んだのは女性 4 名、男性 12 名（成就から登ってきて合流したＳ君も含む）の 16 名**であった。全員が 67～68 才の高齢者である事から見て、立派な成果と言える。

土小屋の国民宿舎前で待ち受けていたバスに乗って、一路**四万十**へ。

四万十川は、時にゆったりと、時に岩を噛み白波を立てながら悠々と流れている。車はその川を縫うようにして下流に向かう。

照り映える緑を映して、きらめきつつ流れる川には勇気・活力を与えられるが、残照の中で暮れなずむ四万十川の情景も、見る人をも溶かし込んでしまうような独特の情趣がある。

この日の宿は、その四万十の流れを見下ろす台地に立てられた瀟洒な旅荘。人気の**ホテル星羅四万十**だ。すぐれたロケーションの上に食事が素晴らしく美味しいのだ。昨夜との落差の大きさに、思わず微苦笑がこぼれてしまう。

上　ハガクレツリフネ

上　ミヤマダイモンジソウ

上　シオガマギク

高校同窓生の登山旅行3日～4日目

9 月 28 日は**四万十川**沿いに下り、高知を観光して**四国剣山**麓まで移動する日だ。

昼間、川はまた別の顔を見せた。両岸を結ぶ**沈下橋は**車と人がひっきりなしに往来し、橋の上からは多くの魚と共に水中の仕掛けが見える。中州の茂みの陰から出てきた小さい川舟が魚を追って静かに溯る。人々の暮らしはこの川の豊かな恵みと深く結びついているのだろう。ホテルの食材も川の天然物が多かった。

川沿いの鰻料理店で食べた**天然鰻の丼**は旨かった。そしてここでも**川えびのから揚げ**が出された。**テナガエビ**だ。

長崎ではテナガエビの一種を**「ラクマ」**と呼び、捕えて食べていた。**浦上川の汽水域**では沢山捕れ、戦後の食糧難時には貴重な蛋白源だった。パソコンで検索すると**宮崎や熊本**では**「ダクマ」又は「ダクマエビ」**とよんで、やはり食べるそうだ。ダクマの意味は分からない。

この日泊った徳島**祖谷の宿**は**平家落人**の末裔だそうな。「源氏の子孫とは今でもしっくりいかない」と語った女将の民謡は鍛えこんだ声でよく響いた。

9 月 29 日、21 人が 100 名山の一つ・**剣山の山頂（1955m）**を踏んだ。みんなの頑張りは讃えられて然るべきと思う。

笹原の中の頂上からは、何処までも折り重なる山々と、そこに襞をなす深い谷々が、そして山肌にへばりつく人家の群とそれらを繋ぐ道路とが見えた。

平安時代の昔、戦乱を逃れてこの山奥に住み着いた人々と、追いかけてきた人達とが、共に過ごした長い歴史が刻まれた土地でもあるのだ。（以上 104 号）

写真下　沈下橋の見学

浜撫子（桂浜）

アケボノ草

シコクブシ
（トリカブトの一種）

オヤマリンドウ